

キャラクター名 プレイヤー名

シンドローム	ブラム=ストーカー モルフェウス	ワークス	UGNチルドレンA	カヴァー	高校生
オプション		年齢	17	性別	男
覚醒	渴望	衝動	憎悪	初期侵食率	35 %
出自	政治権力	経験	永劫の別れ	邂逅	戦友：八重樫 若菜

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値	HP	31
肉体	2	1	2			5	行動値	9
感覚	4	0	0			4	(非装備時)	9
精神	1	0	0			1	戦闘移動	14
社会	1	0	0			1	全力移動	28

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵	5		射撃			RC	1		交渉		
回避	1		知覚			意志	1		調達		
運転：			芸術：			知識：			情報：UGN	3	
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
インフィニティU:刀	白兵	5r+5		LV+13		インフィニティUで作り出した刀
錬成刃・閃光	白兵	19r+5		+25		閃光の如き紅き一閃が敵を切り裂く。
終ノ太刀・霧雨	白兵	29r+5		+41		修行で編み出した、彼の奥義

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

所持品		合計装甲：	0	合計回避：	0
思いでの一品					

ロイス					
対象	感情(pos)	感情(neg)	タイ	タス	消費
八重樫 若菜	P 好意	N 隔意			
七海 弓香	P 親近感	N 不安			
伊庭宗一	P 執着	N 憎悪			
	P	N			
	P	N			
	P	N			
錬金術師	P	N			

最大財産P:	2	残り財産P:	0
--------	---	--------	---

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果：	非オーヴァードのエキストラ化							
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果：	コスト分のHPで復活							
鮮血の一撃	5	2	メジャー	武器	-	対決	-	
効果：	白兵ダイス+LV*1 HP-2							
ブラッドバーン	3	4	メジャー	-	-	対決	80	
効果：	攻撃力+LV*4 HP-5							
クリスタライズ	3	4	メジャー	-	-	対決	100	
効果：	装甲無視 攻撃力+LV*3							
インフィニティU	1	3	マイナー	至近	自身	自動	-	
効果：	攻撃力+Lv+7							
コンセントレイト	2	2	マイナー	-	自身	自動	-	
効果：	クリ値-LV@下限7							
始祖の血統	3	4	メジャー	至近	-	自動	100	
効果：	判定ダイス+LV*2 HP-3							
サポートデバイス	5	3	セット	-	自身	自動	80	
効果：	任意の能力値の判定ダイスLV*2							
クイックダッシュ	2	2	セット	-	自身	自動	-	
効果：	戦闘移動できます							
	★							
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								

彼は普通よりも裕福な家庭で生まれた。
 父親が政治家で、正義感も強く、汚職などもいっさいない。周囲や市民からの信頼も厚い人物だった。
 父は厳しくもあったが、「一度きりの人生だ！思い切り楽しめ」と彼の事を尊重してくれていた。優しく、母親や姉もとても優しく大好きだった。
 そんな父の事を尊敬しており、将来は自分も父親のような人になりたいと思っていた。
 だが…同時に彼は少し思い悩んでいた。
 何の変哲もない、平和な日常。裕福な家庭。優しい家族。
 そんな恵まれた環境の中、彼は思ってしまったのだ……"退屈"だと。
 はたからみれば贅沢な悩みだろう。世界にはもっともっと辛い環境で育つ人がいるだろう。
 彼は理解していたが…それでも、思わずにはいられなかった。
 このまま自分は"普通の人生"を普通に歩んでいくのだろうか？まだ幼いながらも彼はそう思い悩みながらも日々を過ごしていた。
 だが…悩んでも仕方ないことだとわかっていた彼は、なるべく気にしないようにしていた。
 ……そんなある日、彼の人生を変える事件が起こった。
 いつも通り、家族4人で夕食を取っていた。
 そんな時、突如衝撃がはしる。
 ……目を覚ますと、そこは地獄だった。
 先ほどまで食事をしていた家は、もはやみる影もなく、辺りは瓦礫と炎に包まれていた。
 目の前に倒れ伏す、父、母、姉。
 そして彼自身もまるで誰かにそうされたかの様に、壁に手足を瓦礫で貫かれ縫い付けられており、身動きが出来なかった
 そんな地獄の中、暗闇から一人の男が出てきた。
 「おや…まだ生きていたか。運がいいな」
 「ふふふ…少年、この世で一番美しい色は血だと思わないか？」
 そういい男…"伊庭宗一"は目の前に倒れる父をどこにも触れずに持ち上げる。